

## 平成22年5月の解説（府県天気予報）

### 【5月の天候状況】

上旬と中旬は、東・西日本では高気圧に覆われて晴れる日が多くなりましたが、中旬は東日本の日本海側では、寒気の影響で一時天気がぐずつきました。北日本では低気圧や寒気の影響で曇りや雨の日が多くなりました。沖縄・奄美も低気圧や前線の影響で曇りや雨の日が多くなりました。下旬は、太平洋岸を進んだ低気圧や上空に寒気を伴った動きの遅い低気圧の影響で北日本から西日本では曇りや雨の日が多くなりました。特に22日から25日はほぼ全国的に大雨となり、5月として日降水量の記録を更新した気象官署がありました。

月を通しての日照時間は、北日本や東・西日本の日本海側、沖縄・奄美で平年より少なくなりましたが、東・西日本の太平洋側では多くなりました。降水量は北日本の太平洋側で平年より多くなりました。沖縄・奄美では平年並みとなりました。気温は、月を通しての寒暖の変動が大きく、寒気の影響が長く受けた北日本で平年より低くなりました。

### 【5月の検証結果】

17時発表の天気予報による「降水の有無」の全国平均の適中率は、明日予報で89%と例年<sup>(注)</sup>より5ポイント、明後日予報では87%と例年より6ポイント高くなりました。地域毎の適中率では、明日予報は東北、関東甲信、北陸、中国、九州南部地方で例年より5から11ポイント高くなりました。明後日予報は東北、関東甲信、北陸地方と西日本で5から11ポイント高くなりました。明日の最高気温の予報誤差は、東日本で例年より0.5小さくなり、全国平均では0.3 小さい1.8 でした。また、最低気温の予報誤差は大半の地方が例年より0.2 から0.3 小さくなり、全国平均では例年より0.1 小さい1.4 でした。

<sup>(注)</sup>例年値は気象庁HP（予報精度検証）内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

### 【7月の天気予報の利用にあたって】

平年では、7月の中旬から下旬にかけて九州から東北地方で次々に梅雨が明け、本格的な夏が始まります。しかし、7月は梅雨末期の大雨が降りやすい時期であり、時として大きな災害が発生することもあります。去年は、7月19日から26日にかけて、西日本に停滞していた梅雨前線の活動が活発になり、中国地方および九州北部を中心に記録的な大雨となりました。この期間の総雨量は九州北部の多いところで700ミリを超え、7月の平年の月間降水量の2倍近くに達しました。この大雨により、鳥取県、広島県、山口県、福岡県、佐賀県、長崎県において死者が31名となり、特に、山口県防府市では土石流や山崩れにより死者が14名にのぼりました。

梅雨末期の大雨は、総降水量が多くなることに加えて、短時間に大量の雨が集中することもあり大きな被害をもたらします。気象庁では、今年の5月27日より全ての警報・注意報を市町村ごとに発表しています。このため、自分の市町村がどのような状況なのか、これまでよりも具体的に把握することが可能になりました。各地方気象台が発表する警報・注意報などの気象情報を防災対策に活用して下さい。